

甘蔗の雑草防除について (第2報) ムラサキカタバミの防除について

前山豊健・美園 中
(鹿児島県農業試験場大島支場)

MAEYAMA, T. and MISONO, A.
Weed Control in Sugar Cane Field
(II) On the control of *Oxalis mortiana* Zucc.

ムラサキカタバミは本土では夏雑草であるが、当地方では10月上旬に発生始期となり、5～6月には地上部は枯死し、夏期間は休眠期に入るので冬雑草としてとり扱われ、冬作そ菜、甘蔗など畑作物に対する被害が大きい、甘蔗畑における鱗茎の増殖は、平均69.7球で、最高468球にも増加し、その繁殖力は旺盛である。

昭和38年度数種の除草剤についてムラサキカタバミに対する殺草効果を試験した結果、ハイパーXの除草効果は極めて大きい、甘蔗に対する薬害も大きいので適用性がなく、ATA+MCP、H-326、DCMUは除草効果が大き、甘蔗に対する薬害も少なかった。本年度更にこれらの効果試験を実施したので、その結果を報告する。

試験方法と結果および考察

1) A 試験 供試圃場は古成畑に由来する塩壤

土、品種はN:C O.310、3月15日植付。供試薬剤と処理方法は第1表のとおりで、薬剤の処理日は2回区は第1回4月2日・第2回4月20日、1回区は4月14日にそれぞれ散布し、培土は第1区標準区が5月26日と6月23日、第2～7区(処理区)は6月23日に1回行なつた。

試験結果は第1表のようにDCMUは薬害なく、ムラサキカタバミの地上部の殺草効果もかなり大きかつた。H-326は殺草効果も大きい、7～11%減収している。ATA+MCPは新葉にクロソスを生じ、時日の経過と共に回復するが、茎長の抑制或いは茎数減少のため、19～24%の減収を示した。翌春甘蔗収穫後の各区にはムラサキカタバミの再発生が多く、根に貯蔵養分の蓄積が行なわれたあとの春季処理では防除効果がおとる。

第1表 雑草調査と甘蔗の生育調査結果

No.	薬剤と処理方法	ムラサキ カタバミ	その他の 雑草	合計	翌春の カタバミの 多寡	薬害の 多寡	収穫時(a当り)				茎重比率
							茎長	茎径	茎数	茎重	
1	標準区	g 13	g 19	g 32	多	—	m 2.14	cm 2.30	本 1,300	kg 961	% 100
2	DCMU 15g 2回	29	15	44	多	—	2.22	2.23	1,450	953	99
3	〃 10g 2回	164	123	287	多	—	2.19	2.22	1,277	868	90
4	H-326. 30g 2回	4	2	6	中	少	2.05	2.24	1,275	859	89
5	〃 40g 1回	9	6	15	多	ビ	2.26	2.26	1,275	897	93
6	ATA 30g 2回	56	637	693	多	少～中	2.14	2.15	1,142	779	81
7	MCP 20g										
7	ATA 30g 1回	41	3,711	3,752	多	中	2.15	2.38	967	729	76
7	MCP 20g										
8	無除草区	—	8,171	8,171	多	—	—	—	—	—	—

注。標準区は5月26日中耕除草、雑草調査は6月15日 (g/m²)

2) B試験 10月25日ムラサキカタバミ多発畑の土を用いて、框(1m²)試験をした。試験区は第2表のとおりで、処理は12月5日、1月16日の2回行なつた。

第2表 試験結果

No.	薬剤と処理方法	ムラサキカタバミ		その他 の雑草	合計	乾土 1kg 中の鱗 茎数
		葉重	比率			
1	無散布区	99.5	663	202	302	59.0
2	DCMU 15g	0.6	4	0	0.6	19.5
3	〃 15g + 活性剤	0.5	3	0	0.5	17.3
4	H-326 15g	0.5	23	0	0.5	27.3
5	〃 15g + 活性剤	1.1	7	0	1.1	15.3

注. 雑草調査は5月1日。鱗茎数調査は処理から1年経過後。

その結果は第2表のようにH-326よりもDCMUの殺草効果が高い。更に活性剤の加用効果については判然とした傾向がみられなかつた。処理から1年経過後の土中には若干の残存鱗茎があつた。

以上の試験結果から、甘蔗畑におけるムラサキカタバミに対する除草剤としては、DCMUが甘蔗に対して薬害もなく、ムラサキカタバミに対する抑制効果も高い。したがつてDCMUの15g/aを10月以降ムラサキカタバミの発芽始期から、生育期にわたり2回散布することが有効であるが、徹底防除をはかるためには更に散布回数を増加する必要がある。